

『プロヴァンシアル』論争の起源と経過

森 川 甫

ブレーズ・パスカルの『プロヴァンシアルへの手紙』¹⁾は十八の手紙と未完の一つの手紙からなり、1656年初から1657年春にかけて書かれ、パスカルがジャンセニストを擁護して、ジェズイットを論駁するために執筆した一連の手紙である。

ジャンセニストとジェズイットとの論争は十七世紀前半以来のものであるが、恩寵の問題をめぐるアウグスチヌス派とジェズイットとの論争の歴史は、十六世紀中葉にまでさかのぼることができる。『プロヴァンシアル』はジャンセニスト、或いはアウグスチヌス派とジェズイットとの論争がそのはげしさにおいて頂点に達したところにその位置を占めている。これから行う、『プロヴァンシアル』研究は、パスカルとジェズイットの神父たちとの論争、及び、パスカルとポール・ロワイヤルのジャンセニスト達との関係を、当時の文献を用いて明らかにしてゆくことを目指しているが、本稿では、本論に入る前の序論として、『プロヴァンシアル』論争の起源とその経過の概要を記述し、後ほど行う本論の研究を容易にしたいと思う。

一、論争の起源

アウグスチヌス派とジェズイットとは、すでに十六世紀中葉、ルーヴァンにおいて激しく争った。アウグスチヌスの教説に厳密に立脚したルーヴァン大学の神学は、ジェズイットの強力な学校の神学と対立していた。1567年、アウグスチヌス派のバイウス²⁾が断罪され、ついで、1588年、ジェズイットのモリナ³⁾が「神の恩寵の賜物と自由意志の協力について」⁴⁾を著し、予定論と恩寵に関する彼の思想を明らかにし、以後、彼の思想はモリニズムと呼ばれる。この書物は、トマスの信奉者であり、穩健なアウグスチヌス主義を支持するドミニカン⁵⁾をいたく刺戟し、この会派をしてモリニズム攻撃に振起させるに至った。この論争

を前にして、ローマ法王庁はジェズイットとドミニカンをローマに召集し、1597年から1607年まで「恩寵の効果と自由意志に関する」会議を開催した。しかし、この会議は何ら積極的結論を得ないまま終わってしまった。法王庁の秘やかな意図は、恩寵に関するあらゆる論争をやめさせることにあった。信者たちに悪影響を及ぼすことを恐れたからである。

コルネリウス・ジャンセニウス⁶⁾の著述した『アウグスチヌス』⁷⁾は、ジェズイットとジャンセニストとの間のあらゆる論争をむしかえさせた。ルーヴァン大学出身で、更にその教授となったジャンセニウスは、1620年頃、恩寵の問題に関するアウグスチヌスの複雑な思想を綜合する大著作をなす計画をたてた。1638年、夭折したにもかかわらず、ジャンセニウスは、遂に『アウグスチヌス』を完成し、彼の死後、1640年、友人達の手によって、ルーヴァンで出版された。この書物は恩寵に関する論争を再び起し、そして、論争ははじめルーヴァンで、ついで、フランスへと拡がっていった。ここまでの論争は、ジェズイット対ドミニカン、ないしジャンセニストであったが、ここに至って、枢機卿リシュリウ⁸⁾がジェズイットに組して、『アウグスチヌス』を否定したので、政治的要素も加わり、一層複雑化してきた。しかしながら、ジャンセニウスはポール・ロワイヤル修道院の隠士たちの中に強力な支持者を見出した。修道院々長で、サン・シランと呼ばれていた、ジャン・デュヴェルジェ・ド・オーランヌ⁹⁾が、とりわけ熱烈に支持した。サン・シランは『アウグスチヌス』を擁護することを、当時、まだソルボンヌの若い博士であり、隠士たちのうちで最も優秀だった、アントワヌ・アルノー¹⁰⁾に当らせた。サン・シランの宗教的絶対主義は、ジェズイットと結ぶ、リシュリウの余りにも排他的な政策と

衝突し、ジャンセニストとジェズイットの争いは次の三つの状況において、とりわけはげしく戦われた。

1) 1643年、アルノーは『頻繁な聖体拝受について』¹¹⁾を出版した。この著書はサン・シランの厳格な思想を忠実に擁護したものであり、ポール・ロワイヤル運動を宣明した最初の文書である。この書は悔悛の秘蹟と聖体の秘蹟に関する教説を叙述したもので、ジャンセニズムをフランスの民衆に知らせる上に大きな役割を果たした。この書が出版された前後、ジェズイットの教説をめぐる、もう一つの事件が起っている。『プロヴァンシアル』研究を志す立場から云えば、この事件の方が直接の興味がある。何故なら、この事件においては、『プロヴァンシアル』に先立って、ジェズイットの弛緩した道徳を攻撃しているからである。すなわち、1641年、フランス聖職者大会はポーニー神父の著書、『罪の総体』¹²⁾が自由思想家と同じ精神をもち、良き風俗を腐敗へと導いていると非難している。パリの神学部も同調して極めてきびしく非難し、ポーニー神父の著書の犯している過失、殊に正義と性道徳に関する過失を指摘した。1641年、ジェズイットのアントワヌ・シルモン神父¹³⁾はパリで『徳の擁護』を出版した。この書は物議をかもした。何故なら、後に『プロヴァンシアル』において、再び問題となる幾つかの章句の中で、著書は神を愛せよとの誠律を巧みに避けたからである。著者は最後に次の如く結論している。「神はわれわれに神を愛せよと命じているが、実際は、われわれが彼の他の誠律に従うことで満足している。」¹⁴⁾ アルノー自身もこの論争に加わり、シルモン神父を攻撃するために一冊の反駁書を書いた。一方、ソルボンヌはこの論争を回避して、参加しなかった。大学人たちはシルモン神父を支持しているリシュリュウと衝突することを恐れたからである。1643年、僅か61頁の小文書が匿名で出版された。この書は『ジェズイットの倫理神学』¹⁵⁾と題名がつけられていた。アルノーはソルボンヌの博士で、これらの問題に精通している論争家、フランソワ・アリエ¹⁶⁾によって提供された資料を利用して、この文書を著述したのであった。頁数は僅少であったけれども、この文書は重要な意味をもっている。というのは、弛

緩した道徳に対して、カトリック内部からなされた、見事な、最初の攻撃だったからであり、また『プロヴァンシアル』にも強い影響を与えているからである。時として、『倫理神学』はプロテスタントに、とりわけ、デュ・ムーラン牧師¹⁷⁾の『ローマ教会の伝統の列挙』¹⁸⁾に、その起源をもつとされるが、これはジェズイットのヌエ神父¹⁹⁾の単なる推測にすぎないと思われる。『倫理神学』が出版されて以来、ジェズイットの神父たちは道徳に関する彼らの教説を弁護し、そしてジャンセニズム攻撃に力を集中する。ニコラ・コーサン神父は『弁証論』²⁰⁾を書き、ピエール・ルモワヌは『弁証的宣言書』²¹⁾を出版し、フランソワ・パントロー神父²²⁾はド・ボアジック師という偽名を用いて、アルノーの欺瞞と無知を非難する。このように、直接、ジャンセニズムを攻撃すると共に、ジェズイットはリシュリュウの後継者で、彼と同様、国家の統一強化のためジェズイットの権力を必要としている、マザラン²³⁾に接近した。このように、ジェズイットと宮廷とが接近している雰囲気のために、かつてジャンセニズムを支持し、または中立であった多くの人々が、アンチ・ジャンセニスの立場をとり始めた。コニエ²⁴⁾は次のように指摘している。「サン・シランの旧友で、良心問題審議会の議員となった、サン・ヴァンサン・ド・ポールは彼の同僚たちに反対しないようにし、そしてジャンセニズムに反対を表明する方が有利であると打ち明けている。」²⁵⁾

2) 1649年、ソルボンヌは月例会議を開いた。学部理事のニコラ・コルネ²⁶⁾は恩寵の問題に関して、次の七命題を非難決議するよう会議に要求した。大学入学資格者の論文の中にも、このような異端が見出されるとの口実で、彼はこの非難決議の必要性を強調した。七命題は次の通りであった。Ⅰ．神の十戒のあるものは、義人たちにとって、彼らが自己のうちに保有する力によって意欲し、努力する場合でも遵守することは不可能である。Ⅱ．墮落した本性の状態では、人間は内的恩寵に決してさからえない。Ⅲ．墮落の状態では、賞罰に価する行為をするために、人間は必然性からの自由をもつ必要はなく、強制からの自由をもつだけで足りる。Ⅳ．半ペラギウス主義者たちは、個々の行為に対し、また信仰の開始に対し

てさえ、先行する内的恩寵が必要であることを認める点で正しいが、彼らは、人間の意志がこの恩寵に反対することも服従することもできないという点で異端である。V. イエス・キリストが、例外なくあらゆる人のため死んだというのは、半ペラギウスの異端である。VI. 不信心者の行為は罪である。VII. ひそかな悔悛の秘蹟は、隠れた罪に対しては十分でないというのが、かつて教会の感情であった。

コルネはこれらの命題を巧妙に作成していた。何故なら、これらの命題、とりわけ、その最初の五命題はかなりあいまいな表現をとっているからである。正確な意味を明晰に識別し難い上記の命題の如き表現は、多くの解釈をとることが可能になってくる。一見して、異端的と見えることが、観点を変えると全く正統的となることもあり、その逆もありうる。これらの命題はまさしくそういう種類のものであろう。コルネは一般的なことを述べ、特定の著者のことには言及していないが、彼は疑いもなく、ジャンセニウスを念頭においてこれらの命題を提出したのであった。ジェズイットからのこの攻撃に対して、ジャンセニスト側からは多くの文書が書かれ、ジャンセニウス擁護の論陣を張った。その中の第一人者は、誰よりもまず、アントワヌ・アルノーであり、彼は『ニコラ・コルネによってなされた企てに関する考察』²⁷⁾を著し、コルネ理事はジャンセニウスを断罪することにより聖アウグスチヌスをも断罪していると非難した。アルノーは第一の命題に関して次の如く説明している。「(第一の命題は) 聖アウグスチヌスの極めて明晰で、判明な、かくも多くの章句によって正当とされているイーブルの司教の書物²⁸⁾の一箇所から殆んど逐語的に引用されており、このことを疑うことのできるほど、片意地な者は誰もいないだろう。』²⁹⁾ ついで、各命題を分析して、彼はこの命題の作成がどれほど命題を欺瞞的なものにしてしているかを示した。

ジェズイットはこれら七命題の非難文を印刷して、パリと地方に流布した後、それをローマ法王庁へ送った。ヴァブルの司教になったイザーク・アペール³⁰⁾は1650年法王イノケンチウス十世³¹⁾に手紙を書き、最初の五命題を非難するよう要求した。これらの非難に対して、アルノーは『ヴァブ

ルの司教によって、作成された手紙に関する考察』³²⁾を書いて答えた。しかし、この弁駁書は殆んど効果がなかった。マザランはルイ十四世の署名入りの手紙を法王に送り、最初の五命題を非難するよう要求した。そして、1653年、法王は五命題を異端として非難することを表明し、そして1656年法王アレキサンデル七世³³⁾は五命題がジャンセニウスの著作の中に認められることを宣明した。

五命題に関する以上の論争と共に、ポール・ロワイヤルに対する攻撃もかなりはげしく行われた。ド・ブリザシエ神父³⁴⁾は、ポール・ロワイヤルの人々が不敬虔な心をもち、カルヴィニズムとひそかに通じていると云って非難した。余りにもはげしい非難であるので、パリ大司教が教書をもってブリザシエを批判したが、一度ひろまった偽りの流言は、ひろがり続けた。ジェズイットの宮廷における大きな勢力を知って、ジャンセニストは遂には沈黙を守るようになった。ジャンセニストは大勅書を受け入れ、イノケンチウス十世の決定に服することを公けに明らかにした。アルノーは1654年、次の如く記している。「法王の大勅書によって非難された命題に関しては、全く疑問のさしはさむ余地はない。何人もこの勅書を服従心と尊敬心をもって受け入れている。この大勅書に服従しなかったとの理由で誤って非難されている人々は、いかなる意味や説明があろうとも、非難されたこれらの命題を支持したり、また今後、支持することがないであろうと、すでに宣明しているし、またこの文書によって宣明している。」³⁵⁾

ジェズイットは形勢の有利なことに勇気づけられて、ジャンセニストをきびしく非難した。アンナ神父は、『ジャンセニストの詭弁』³⁶⁾を著して、法王によって非難された五命題はジャンセニウスの著作からとり出されたことを立証できると主張した。これに対して、アルノーがはげしく反駁したが、1650年、マザランは司教会議を召集し、五命題をジャンセニウスのものとして非難するとの決議に署名した。1655年、会議は全聖職者に対して非難書に署名することを強要した。

3) ポール・ロワイヤルと親しい関係もっていた、リアンクール侯爵³⁷⁾はサン・シュルピス教区に居住していたが、その教区の主任司祭ジャ

ン・ジャック・オリエ³⁸⁾はジャンセニストに対して強い対敵心をいだいていた。侯爵がサン・シュルピスの助任司祭ピコテに告解をしようとする時、この助任司祭は、侯爵がポール・ロワイヤルとの関係を全面的に絶たない限り、告解をさせないと云った。侯爵はこの要求を拒絶したので、ピコテは侯爵に罪の赦しを与えることを拒絶した。そこで再び、ジャンセニストとジェズイットとの間の論争が始まった。この時、アルノーは『ある貴族への手紙』³⁹⁾を著し、人々に事情を明らかにしようと決意した。この手紙の中で、彼はジェズイットの不当な非難をなじり、ジャンセニストはイノケンチウス十世の大勅書を真面目に受け入れているのであるから、異端として扱うことはできない筈だと主張した。国王の聴問司祭であるアンナ神父⁴⁰⁾は『現在その説明が必要とされているいくつかの要求に対する回答』において、アルノーはカルヴィニストであると非難した。アルノーは『ある侯爵、重臣への第二の手紙』⁴¹⁾を書き、まず第一に、ポール・ロワイヤルに対してピコテがなした、異端という非難を論駁するために、ピコテの行為をとりあげて攻撃し、ついでジャンセニウス著の『アウグスチヌス』は過不足なく、アウグスチヌスの思想を明らかにしていることを示して、ポール・ロワイヤルのアウグスチヌス思想を擁護した。ソルボンヌではアルノーの『ある侯爵、重臣への第二の手紙』を審査するため、特別委員会が組織され、五命題は非難すべきものと断罪された。断罪は二つの項目からなっていた。一つは、イノケンチウス十世によって非難された五命題が『アウグスチヌス』に存在するか否かという、事実に関する問題⁴²⁾であった。もう一つは、この論争の根底にある有効な恩寵の問題、つまり、この五命題が異端的意味をもつか否かという権利問題⁴³⁾である。

ポールロワイヤルは極めて困難な局面におちいった。1656年1月14日、アルノーは事実問題で断罪され、さらに権利問題でも断罪されうになった。これ以来、この論争はもはや、専門家だけのものではすまされなくなった。ソルボンにおけると同様、多くのサロンにおいても教養ある人々がこの問題について論争した。サロンでの論争にはアルノーは苦手であった。彼の文体は重厚すぎて

優雅ではなかった。「そこでは、彼の博学な文書は役にたたぬ表現になってしまう。……民衆はそんな文書を読まないだろう。」⁴⁴⁾神学部入学資格者であった、若いニコール⁴⁵⁾もやはり、民衆相手は得意ではなかった。アルノーは丁度その時、ポール・ロワイヤル・デ・シャンでパスカルに出会った。そして、そこで、アルノーはパスカルに出馬を懇請したのであった。

二、論争の経過

「プロヴァンシャルの手紙は、この論争の経過につれて次々と起る新たな事件に直面するに従い、その方法、その調子、またその主題が変化していった」⁴⁶⁾ので、まず最初に、その全体の経過を概観するのが適当だと思われる。このため、取扱われている問題別に、十八の手紙を分類すれば、次のようになる。

- (1) 第一から第三の手紙、アルノーのための弁護、
- (2) 第四の手紙、現実の恩寵について、
- (3) 第五から第九の手紙、ジェズイットの弛緩した道徳を攻撃、
- (4) 第十の手紙、ジェズイットにおける悔悛と告悔の問題について、
- (5) 第十一から第十六の手紙、ジェズイットからの論駁に対するパスカルの回答、
- (6) 第十七、十八の手紙、ジャンセニウスのための擁護。

(1) 第一から第三までの手紙において、パスカルは権利問題に関して、ソルボンヌで非難されたアルノーを弁護することに努めている。ジャコバンと呼ばれる、パリのドミニカン⁴⁷⁾は彼らのトマス教的教義がモリニズム⁴⁸⁾よりジャンセニズムに近いにもかかわらず、アルノーに対敵してジェズイットの味方をした。そこで、パスカルはこれらジャコバンを非難している。ここで問題になっている近接能力⁴⁹⁾に関して、ジャコバンとモリニストは「すべて義人は常に律法をまもる能力を有する」⁵⁰⁾と云って同盟を結んでいる。しかし、一旦この近接能力が認められると、モリニストにとっては、行為は人間の自由意志次第となるが、逆にジャコバンにとっては、さらに神からの恩寵が必要である。ところで、アルノーの主張はジャコバ

ンの主張していることと同じである。同様に、十分なる恩寵に関しては、モリニストは「万人に等しく与えられている恩寵であって、これは自由意志のままになる。すなわち、この恩寵は人々の望むところにより有効にも無効にもなる。この場合、そのうえ、神のいかなる助力も必要でなく、また神は有効に振舞われてなら欠くところがない。……そして、それ故、彼らはこれを『十分なる恩寵』と呼ぶのである。事を行うのにこの恩寵だけで十分だからである。」⁵¹⁾と主張する。ジャコバンによれば、「人々は十分なる恩寵だけで行動することは決してない。人々が行動するためには、実際に彼らの意志を促して行動させる『有効なる恩寵』が神から与えられていなければならない。そして、これは誰にでも与えられているわけではない。」⁵²⁾このようにジャコバンはジャンセニストと全く同様に、十分なる恩寵を否定している。ジャコバン派は「なんの意味もない言葉を使う点ではジェズイットと同じでも、実は意見は反対で、むしろ内容はジャンセニストと同じことになる。」⁵³⁾このように立場の異なるジャコバン派とジェズイットは、何故同盟を結んでいるのであろうか。ジェズイットはただ世俗的利益からジャコバン派に結びついたのであった。両者の根本的不一致を「近接能力」という造った用語によって隠しているのである。

1656年、『ソルボンヌの博士、アルノー氏のための弁護』⁵⁴⁾という題のついた文書が現われたがプロヴァンシアルの第一の手紙に関しては、この影響をパスカルは強くうけている。彼は「そこから、多くの議論とその議論の筋立と、また彼が構成したコミックな場面の最初の着想を得た。」⁵⁵⁾最も信頼しうるとされている著述家のケネル⁵⁶⁾とフィユー⁵⁷⁾は、この文書はニコールによって書かれたもので、アルノーがそれに協力した⁵⁸⁾。そして、ゲージェ師⁵⁹⁾によれば、第一の手紙はニコールとアルノーによって校正されている⁶⁰⁾。

第二の手紙に関しては、アルノーの小冊子『諸考察』⁶¹⁾と、ニコール著とされている小冊子に影響されている⁶²⁾。第二の手紙は、フィユーによれば、ポール・ロワイヤル・デ・シャンでニコールによって校正されている⁶³⁾。第三の手紙に関しては、パスカルは「アルノーの『ある侯爵、重臣へ

の第二の手紙』がソルボンヌで審理される前、およびその期間中に、アルノーによって出版されたすべての文書の影響をうている。」⁶⁴⁾

(2) 第四の手紙は独自の位置を占めている。第三の手紙までの、アルノー弁護という守勢から、ジェズイット攻撃に転じるからである。パスカルは現実の恩寵に関してジェズイットに議論をいどむ。ジェズイットによれば、「われわれが罪を犯す前に、神がわれわれにその悪を知らしめ、われわれを罪から遠ざけるよう鼓吹されなければ、罪を犯したとしてもわれわれの責任とはなりえない。」⁶⁵⁾ジャンセニストは反対に、「現実の恩寵なしに犯された罪でも責任は免れない。」⁶⁶⁾と主張している。第四の手紙で登場するジェズイットの神父は、彼の会派の論争家であるボーニー神父やアンナ神父やル・モワヌ博士を引用して、彼の論拠を立証しようとし一方、パスカルはモリニズムを適確に、きびしく攻撃することによって、人間に対する神の働きかけに関する彼の思想を定義しようとしている。

現実の恩寵に関するすべての問題に関しては、パスカルはアルノーが1651年、ル・モワヌの教説を打破するために書いた『諸神父の弁証論』⁶⁷⁾から引用している⁶⁸⁾。

(3) 第四の手紙の末尾にパスカルは次の如く書いている。「それではあなたは、かれらのでたらめが他の事におけるよりも道徳においていっそう甚だしいことをまだご存知ないのですか。かれは多くの奇妙な実例を教えてください、あとはそのうちに話してくれるとのことでした。この次には、かれから聞いた話を中心にお話しましょう⁶⁹⁾。」第五の手紙以下の五通の手紙は、良心問題判例学に基いたジェズイットの道徳に関するものである。パスカルは、この道徳の主要な原則⁷⁰⁾、および、ジェズイットの著作、主として、エスコバル著の『倫理神学』⁷¹⁾から引き出された、この道徳のいくつかの適用例を示している。

あらゆる国家、あらゆる身分の人々に対処するため、ジェズイットは「あらゆる多様性に適したさまざまな良心問題判例学者をもつ必要があった。」⁷²⁾ジェズイットは精神の弱い人々には、「親切で融通のきいた指導を与える」⁷³⁾なまぬるい良心問題判例学者を用意し、彼らのたてた主要な原則を利用することによって精神の弱い人々の要

求をかなえている。逆に、もしも、余りにもなまぬるいと云って非難されると、「厳格な指導者たちと、その人たちのキリスト教的掟の厳しさに関する著書を公衆の面前に持ち出す。」⁷⁴⁾

パスカルは第五から第九の手紙で、良心問題の具体的例をあげ、ジェズイットの弛緩した解決を示している。彼は、聖職禄受領者、司祭、修道士、下僕、商人のそれぞれの場合に、ジェズイットがなしている、彼らの原則の適用を分析している。そして、パスカルは、あらゆる人々に対して迎合するために用意された、ジェズイットの甘い道徳を人々に暴露しようとしているのである。

第五の手紙に関しては、アルノーがジェズイットの道徳に対する攻撃のため、資料を提供した。パスカルとアルノーの協力関係は明瞭である⁷⁵⁾。そして、ニコールがパリでこの手紙を校正したとフィユーが伝えている⁷⁶⁾。

第六の手紙に関しては、ニコールが校正したと同じくフィユーが述べている⁷⁷⁾。

第七の手紙は、特に、ボアロー⁷⁸⁾、アルノー、ニコールの賞賛的になった。フィユーの言葉によれば、ニコールがデ・ジュールサン館で校正している⁷⁹⁾。この手紙では、パスカルは、ジェズイットを相手として、1643年と1644年に出版された多くの文書、とりわけ、エルマン⁸⁰⁾の著作とアルノーの小冊子から影響をうけている⁸¹⁾。幾人かの作家たちの証言によれば、この第七の手紙の反響は極めて大きかった。マザランはこの手紙を大急ぎで読んだ⁸²⁾。国王は王室附司祭のル・カミュ師に読ませ、また、アンナ神父ははげしい不満を示したとエルマンが伝えている⁸³⁾。

第八の手紙に関しては、ニコールがデ・ジュールサン館で校正した。パスカルはアルノーの『倫理神学』によって、ポーニーやセロ⁸⁴⁾をそこに引用している。1656年4月25日、匿名の著者が『田舎人よりポール・ロワイヤルの幹事への手紙』⁸⁵⁾という新しい回答を出した。ジェズイット自身も反駁することに決め、この時期に、『「プロヴァンシャルの手紙」に対する、ジェズイット側からの最初の回答』を出版した⁸⁶⁾。

第九の手紙に関しては、パスカルはアルノーの『倫理神学』とこの書物より以前に彼の友人たちによって書かれた文書の影響をうけている⁸⁷⁾。グ

ージェによれば、この第九の手紙の概要はデ・ジュールサン館でニコールからパスカルに与えられ、また、フィユーによれば、ニコールはポール・ロワイヤル修道院の近くでアルノーと共に住んでいるアムラン氏宅でこの手紙を校正した⁸⁸⁾。他方、ジェズイットは『ある貴族への手紙』という題のついた、新たな回答を公けにした⁸⁹⁾。

(4) 第十の手紙においては、パスカルはジェズイットの悔悛と告解をはげしく攻撃する。「これほどの窮地にまで彼らを導いている光が如何に誤ったものであるかを彼らに知らせて下さるよう神に祈る。」⁹⁰⁾とパスカルは述べている。フィユーは、この手紙にはニコールが参加していないと云っている。しかし、アルノーの協力は極めて明白である。1641年から1655年の間にアルノーが書いた多くの著作の中ですでに指摘されている、良心問題判例学者が引用されている⁹¹⁾。ジェズイットの著者によって作成された、新たな回答が、この時期に現われた⁹²⁾。

(5) 第十一から第十六の手紙はジェズイットの道徳に関するものである。パスカルは第十の手紙までに用いてきたフィクション形式をやめ、「敬愛する神父さんたちへ」⁹³⁾と直接、ジェズイットに対して語りかけた。この手紙では、彼はジェズイット攻撃よりも、むしろジャンセニスト擁護の守勢にまわらなければならなかった。プロヴァンシャル論争が展開されてゆくに従い、ジェズイット側からも多くの反駁文が出て来た⁹⁴⁾。ジェズイットは『プロヴァンシャル』の著者を異端者、カルヴィニスト、独自性のない中傷者、神学者や聖職者にのみ限られていた問題を不用意に公けにして民衆をまどわす者として、非難している。これに対し、パスカルは、とりわけ、「聖事を嘲弄の種にした」⁹⁵⁾との非難に反駁している。第十一の手紙以後、ヌエ神父が『プロヴァンシャル』の各手紙に反駁している。ヌエの反駁に答えて、第十二の手紙では施与、沽聖、破産の問題を論じ、第十三、十四の手紙では、殺人の問題をとりあげ、第十五の手紙では、ジェズイットの誤ったジャンセニスト非難の悪どきを指摘し、第十六の手紙では、ポール・ロワイヤルの「聖体」観について論じている。

第十一の手紙の大部分において、パスカルは、

1654年に出版されたアルノーの著作の影響を強くうけている。フィユーによれば、ニコールがこの手紙をポール・ロワイヤルの近くに住んでいるアムラン氏宅で校正している⁹⁶⁾。他方、グージェによれば、ニコールはデ・ジュールサン館でこの手紙の概要をパスカルに与えた⁹⁷⁾。

サン・ジュールの『日記』⁹⁸⁾によれば、アルノーとニコールは、ヌエ神父の『欺瞞集』⁹⁹⁾に反論するため、その準備をした。第十二の手紙では、パスカルはこの二人によって準備された資料を利用した。グージェによれば、ニコールはデ・ジュールサン館でこの手紙の概要をパスカルに与え、フィユーによれば、ニコールはこの手紙をアムラン氏宅で校正した¹⁰⁰⁾。

第十三の手紙では、パスカルはヌエ神父によって公刊された、多くの『欺瞞集』に反駁している。この手紙では、パスカルは1644年、エルマンが書いた『ジェズイットのための弁証論に対するパリ大学の回答』¹⁰¹⁾と、アルノーの『ある神学者からポレマルクへの手紙』¹⁰²⁾の影響をうけている。パスカルはまた、1652年から公刊された、エスコバルの『倫理神学』からも引用している。フィユーは、この第十三の手紙の概要はニコールの手によってなされ、また、彼がアムラン氏宅で校正したと述べている¹⁰³⁾。

第十四の手紙に関しては、「パスカルは、われわれの知らない回想録によってか、或いは、彼の協力者が用意した引用によって資料を得た。」¹⁰⁴⁾ フィユーはニコールがこの手紙の概要を書き、また、この手紙をアムラン氏宅で校正したと云っている¹⁰⁵⁾。

第十五の手紙に関しては、ジェズイットに対してアルノーがなした多くの論駁文書の影響をうけている。フィユーによれば、「第十五の手紙は、全部パスカルの手によって書かれた。」そしてこの手紙はニコールによって校正された¹⁰⁶⁾。

第十六の手紙では、パスカルは特に、アルノーの『ある侯爵、重臣への第二の手』に影響されている。フィユーは、「この手紙はヴォーミュリエにおいて書かれた。ニコール氏がその資料を与えた」と述べている。そして、グージェは、「ニコール氏は同じ頃、ヴォーミュリエへ小旅行に出掛けたが、小さな手紙への配慮を捨はしなかった。

彼は最後の三通の手紙の資料を用意していた。」後年、1674年、アルノーは、この手紙がパスカルの手に全然かかかっていないわけではないと述べている¹⁰⁷⁾。

(6) 第十七と十八の手紙においては、パスカルは第一の手紙と同様、ふたたび、恩寵の問題と五命題をとりあげる。しかし、前回と異って問題の本質をより深くついている。この二通の手紙はジャンセニズムを異端としてはげしく非難した、アンナ神父に反駁している。

第十七の手紙では、パスカルはとりわけ、アルノーの『ある侯爵、重臣への第二の手紙』の影響をうけており、アルノーとニコールの協力を得ていることは明白である。ラパンは、第十七の手紙がアルノー自身によって執筆されたときえ云っている¹⁰⁸⁾。

1657年3月24日附の第十八の手紙に関しては、パスカルはやはり、アルノーの著書から強い影響をうけ、またアルノーとニコールがジェズイットとの論争に用いた資料を利用した。当時、ポール・ロワイヤルには論争を中止して沈黙を守ろうとするかなり強い動きがあったが、アルノー、ニコール、パスカルの協力関係は乱れなかったようである。ラパンは、この手紙がアルノーによって書かれたものであると云い、フィユーは「ニコールが書いた『ポール・イレネの論究』に基いて作成された」と云い、グージェはニコールが資料を用意したと云っている¹⁰⁹⁾。

む す び

以上、プロヴァンシアル論争の起源とその経過を概観してきたが、恩寵と道德に関して、カトリック内部の二大勢力であった、ジャンセニストとジェズイットは真向から対立している。プロヴァンシアル論争当時のジェズイットの宗教思想、とりわけ、論争において重要な役割を果たした、アンナ神父とヌエ神父の思想を調査し、論争における彼らの主張とパスカルの主張を比較検討し、さらに、ジャンセニストの宗教思想、とりわけ、ジェズイットとの論争に強力な役割を果たし、そしてプロヴァンシアル論争においては、パスカルと協力したアルノーとニコールの思想を調査研究し、ついで、この三人の協力によって生まれた『プロヴ

アンシアル』に、果してパスカルの独自性があるのか否か、もしあるならば如何なるものであるかを考察したい。本稿は上に述べた今後の研究の序論としたい。

- 註1) *Les Provinciales ou les lettres écrites par de Montalte à un provincial de ses amis et aux RR. PP. Jésuites.* テキストとしては、*Oeuvres* de Pascal du à MM. Léon Brunschvicg, Pierre Boutroux et Félix Gazier, tomes IV, V, VI, VII, (Paris, Hachette, Les Grands Ecrivains de la France, 1914—1926) を用いる。以下、このテキストを、G. E. でもって表わす。
- 2) Baius (1513—89)
 - 3) Luis Molina (1535—1600)
 - 4) *De concordia liberi arbitrii cum divinae gratiae donis*
 - 5) Dominicains
 - 6) Cornelius Jansénius (1585—1638)
 - 7) *Augustinus*, Louvain, 1640.
 - 8) Jean Armand du Plessis Richelieu (1585—1642)
 - 9) Saint-Cyran (Jean Duvergier de Hauranne) (1581—1643)
 - 10) Antoine Arnauld (1612—1694)
 - 11) *De la Fréquente Communion où les Sentiments des Pères, des Papes.....*
 - 12) Etienne Bauny (1564—1649), *Somme des Péchés qui se connoissent en tous états*, 1640.
 - 13) Antoine Sirmond (1591—1643), *Défense de la vertu*, 1641.
 - 14) Cognet, *Les Provinciales*, Garnier, 1965. p. IX.
 - 15) *Théologie morale des Jésuites*, 1643.
 - 16) François Hallier (1595—1658) .
 - 17) Du Moulin(1568—1658),パリ郊外 Charenton のフランス改革派教会の牧師。当時の、フランス・プロテスタントの代表的論争家。
 - 18) *Des Traditions et de la perfection et suffisance de l'Escriture Sancte...avec un catalogue ou dénombrement des traditions romaines*, 1631.
 - 19) Jacques Nouet (1605—1680)
 - 20) Nicolas Caussin (1583—1651), *Apologie des religieux de la Compagnie de Jésus.*
 - 21) Pierre Le Moyne (1602—1672), *Manifeste apologétique.*
 - 22) François Pinthereau
 - 23) Mazarin (1602—1661)
 - 24) Abbé Louis Cognet, 現存の、最もすぐれた、ジャンセニスム研究家の一人。 *Les origines de la spiritualité française au XVIIe siècle*, 1948, *La Mère Angélique et son temps*, 2 vol, 1950 et 1952, *Le Jansénisme*, 1964, 等の著作がある。

- 25) Cognet, *Le Jansénisme*, P.U.F., 1964, p.49
- 26) Nicolas Cornet (1592—1663).
- 27) *Considérations sur l'entreprise faite par Nicolas Cornet.*
- 28) Jansénius の *Augustinus* のこと。彼は 1636 年イーブルの司教に任命されている。
- 29) Cognet, op. cit., p. XIV.
- 30) Isaac Habert (1600—1668).
- 31) Innocent X (1574—1655)
- 32) *Considérations sur la lettre composée par M. l'évêque de Vabres.*
- 33) Alexandre VII (1599—1667)
- 34) Jean de Brisacier. (1592—1668), ジェズイット.
- 35) Cognet, op. cit., P. X VI.
- 36) François Annat (1590—1670), ジェズイット の論争家, *Cavilli Jansenianorum Chicaneries des Jansénistes*, 1654.
- 37) Duc de Liancourt, 1674年没.
- 38) Jean-Jacques Olier (1608—1657)
- 39) *Lettre d'un Docteur à une personne de condition*, 1655.
- 40) *Réponse à quelques demandes dont l'éclaircissement est nécessaire au temps présent, par le P. François Annat de Compagnie de Jésus*, 1655.
- 41) *Seconde Lettre à un duc et pair*, 1655.
- 42) la question de fait 事実問題と呼ばれている。
- 43) la question de droit 権利問題と呼ばれている。
- 44) Albert Bayet, *Les Provinciales de Pascal*, SFELT, 1946, p. 27.
- 45) Pierre Nicole (1625—1695).
- 46) Jean Mesnard, *Pascal*, Hatier, 1962, p. 75.
- 47) Jacobins. ローマではドミニカンがジェズイットの敵であったが、フランスでは宮廷から異端とみなされることを恐れて、ジェズイットと結んだ。
- 48) molinisme. 恩寵と、自由意志に関する、スペインのジェズイット, Molina の教説。これらの問題に関するジェズイットの思想を表現するのに用いられる。
- 49) pouvoir prochain.
- 50) G. E. t. IV, p.129.
- 51) G. E. t. IV, p.157.
- 52) G. E. t. IV, p. 157.
- 53) G. E. t. IV, p. 158.
- 54) *Défense de la Proposition de Mr. Arnauld Docteur de Sorbonne, touchant le droit. Contre la Première Lettre de Monsieur Chamillard Docteur de Sorbonne, et Professeur du Roy en Théologie. Par un Bachelier en Théologie de la Faculté de Paris.*
- 55) G. E. t. IV, p. 122.
- 56) Pasquier Quesnel (1634—1719).
- 57) Jacques Fouillou (1670—1736).
- 58) G. E. t. IV, p. 112.

- 59) Abbé Claude-Pierre Goujet, (1697—1767).
 60) Cf. G. E. t. IV, p. 108.
 61) *Considérations*.
 62) Cf. G. E. t. IV, p. 152.
 63) Cf. G. E. t. IV, p. 152.
 64) G. E. t. IV, p. 194.
 65) G. E. t. IV, p. 55.
 66) G. E. t. IV, p. 55.
 67) *Apologie des Saints Pères*, 1651.
 68) Cf. G. E. t. IV, p. 231.
 69) G. E. t. IV, pp. 269—270.
 70) la doctrine de la probabilité 蓋然的意見の教説, la direction d'intention 意見の誘導, la doctrine des équivoques 兩義論法 la restriction mentale 心内留保の四つ。
 71) Antonio Escobar (1589—1669), スペインのジェズイット *Liber Theologiae moralis*, 1644.
 72) G. E. t. IV, p. 300.
 73) G. E. t. IV, p. 300.
 74) G. E. t. IV, p. 301.
 75) Cf. G. E. t. IV, p. 275.
 76) Cf. G. E. t. IV, p. 274.
 77) Cf. G. E. t. V, p. 8.
 78) Nicolas Boileau (1636—1711)
 79) Cf. G. E. t. V, p. 57.
 80) Godefroy Hermant (1617—1690).
 81) Cf. G. E. t. V, p. 58.
 82) Cf. Rapin, *Mémoires*, t. I., p. 375.
 83) Cf. op. cit., t. III., p. 65.
 84) Cellot.
 85) *Lettre d'un Provincial au Secrétaire de Port-Royal*, 1656.
 86) Cf. G. E. t. V, p. 112.
 87) Cf. G. E. t. V, p. 166.
 88) Cf. G. E. t. V, p. 164.
 89) Cf. G. E. t. V, p. 164., *Lettre à une personne de condition, sur le sujet de celle que les Jansénistes publient contre les Jésuites*
 90) G. E. t. V, p. 191.
 91) Cf. G. E. t. V, p. 220.
 92) Cf. G. E. t. V, p. 218.
 93) G. E. t. V, p. 307.
 94) 例えば, *Première Réponse aux lettres que les Jansénistes publient contre les Jésuites*.
 95) G. E. t. V, p. 307.
 96) Cf. G. E. t. V, p. 283.
 97) Cf. G. E. t. V, p. 283.
 98) Baudry de Saint-Gilles, 1668年没, *Journal*.
 99) *Impostures*.
 100) Cf. G. E. t. V, p. 352.
 101) *Réponse de l'Université de Paris à l'Apologie pour les Jésuites*.
 102) *Lettre d'un Théologien à Polémarque*.
 103) Cf. G. E. t. VI, p. 5.
 104) G. E. t. VI, p. 121.
 105) Cf. G. E. t. VI, p. 121.
 106) Cf. G. E. t. VI, p. 169.
 107) Cf. G. E. t. VII, p. 63.
 108) Cf. G. E. t. VI, p. p. 318—319.
 109) Cf. G. E. t. VII, p. 13.